

## 白内障手術が軽度認知機能低下を抑制 藤原京スタディのデータ解析

高齢者の軽度認知機能低下は、白内障手術により抑制される可能性が示唆された。高齢者約3,000人を対象として2007年から進められている大規模疫学調査「藤原京スタディ」のデータを解析した結果だ。奈良県総合医療センター眼科の宮田季美恵氏、奈良県立医科大学眼科学教授の緒方奈保子氏らが、第68回日本臨床眼科学会(11月13~16日、学会長=岡山大学大学院眼科学教授・白神史雄氏)で報告した。

### 手術群で軽度認知機能低下のオッズ比0.8

認知症、白内障はともに、高齢になるほど増加する。白内障などの視覚障害が認知機能低下をもたらす可能性も指摘されている。2010年の米・Michigan大学の報告では、高齢者625人を約11年間追跡した結果、視力良好者では認知症発症率が63%低かった。白内障手術と認知機能の関係については、改善したという報

告と関連性なしとする報告が相半ばしている。今年7月の国際アルツハイマー病会議では、米・Case Western Reserve大学から、白内障手術群では非手術群に比べ認知機能、日常生活動作のスコアが良好だったと報告されたが、症例数が30例弱と少なかった。

藤原京スタディは、高齢者のQOLや生活機能の影響因子を調べる目的で、2007年に開始された大規模前向きコホート研究。奈良県立医科大学が中心となって進めている。宮田氏らは、このデータを用いて白内障と認知機能の関係を検討した。

対象は同スタディに登録された一般高齢者2,878人のうち、認知機能検査(MMSE)、矯正視力検査を受け、かつ白内障の状態、教育歴に関する

自己記入式質問票に回答した2,764人。認知機能低下と白内障手術との関連については、MMSEスコアが23点以下へ明らかに低下した高齢者150人を除く2,614人を、①白内障手術を受けた白内障術後群617人②白内障と診断されたが手術を受けていない、あるいは白内障と指摘されたことがない白内障手術なし群1,997人の2群に分けて検討した。

多変量ロジスティック回帰分析で、軽度認知機能低下(MMSE 24~26点)のオッズ比は、白内障手術なし群に比べ、白内障術後群で0.81と有意に低かった。同氏は「軽度認知機能低下は可逆的なため、白内障手術によって改善する可能性が示唆された」とまとめた。

## OKレンズは未成年者でも有効かつ安全 多施設共同研究、6カ月の中間解析

オルソケラトロジー(OK)レンズは、未成年者でも有効かつ安全であることが、多施設共同臨床研究の中間解析で分かった。京都府立医科大学眼科の中村葉氏らが報告した。

### 1週以降、約8割が視力1.0以上に

OKレンズを就寝時に装用すると、屈折異常が矯正され、起床時以降に良好な裸眼視力が得られる。しかし、正しい処方と使用方法の徹底が不可欠だ。このため、わが国で最初に

OKレンズ製品が承認された2009年4月に、日本コンタクトレンズ学会から「オルソケラトロジー・ガイドライン」が発表された。適応となる年齢は20歳以上とされたが、他のアジア諸国では、未成年者への処方が広く行われている。未成年者では近視進行抑制効果、スポーツ時のメガネ不要といったメリットが大きい。就寝前後の装脱のため、保護者の管理がしやすい点も好ましい。

そこで、京都府立医科大学、愛媛

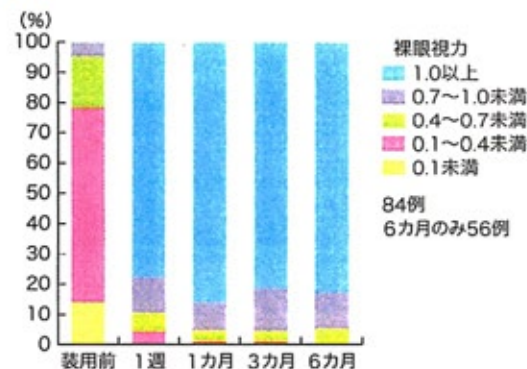
大学、慶應義塾大学の共同研究で、未成年者におけるOKレンズの安全性、有効性が検討された。対象は年齢6~16歳(平均10.7歳)の42例84眼。

東レ製プレスオーコレクト®を3年間装用する。今回は6カ月後までの成績を解析した。

裸眼視力は装用前に約8割が0.4未満だったが、1週以降、1.0以上が約8割を占めた(図)。自覚屈折度、角膜曲率半径も1週以降、有意な改善が認められた。角膜内皮細胞密度に変化はなかった。角膜上皮障害が約10%、アレルギー性結膜炎が約2%見られた

が、いずれも点眼処方などで継続可能だった。中村氏は「未成年OKレンズ装用者の6カ月の経過は良好で安全」と結論付けた。

図 未成年オルソケラトロジーレンズ装用者の裸眼視力の推移



(中村葉氏提供)